

〈編集後記〉

「相愛国文」第十二号をお届けする。専任教員による口頭の研究成果を取載することができた。忌憚なき批評の寄せられんことを切に願う次第である。

ここ数年の「変革」、昨今の実学志向の中、国文学という学問の置かれた状況は、決して良いものとは言えない。そうした△時代閉塞の状況▽の中で、研究誌を刊行し、世間に問いつづけることの意味を改めて考える時期にもさしかかっている。実際、休刊・廃刊する研究誌も後をたたないと風聞する。

しかし、にも関わらず、世間に対し問い続けたいとの衝動に駆られる。「春曙文庫」など、古き書物への愛着の念を培うに十全な環境に籍を置く者として、外に向かって発信しつづけることは、今日逆風のなかにあるうとも、十年、二十年というスパンで見たときに、意義なしとしない「何か」があるのではないか。そのことは学科の形態云々とはまた別次元のことと思う。

本学国文学科もその名称変更の手続きに入った。「相愛国文」もまた新たな第一歩を踏み出さねばならないかも知れないが、その本質は決して変わらない。

(Y)

〈執筆者一覧〉

橋本 雅之	本学国文学科助教
鈴木 徳男	本学国文学科教授
山本 和明	本学国文学科助教
鳥井 正晴	本学国文学科教授

相愛国文 第十二号

平成十一年三月二五日 印刷

平成十一年三月三十日 発行

編集・発行 相愛女子短期大学国文学研究室

〒559 0033 大阪市住之江区南港中四―四―一

Tel 〇六一六六一二―五九〇〇(代)

印刷所 和泉書院

〒543 0002 大阪市天王寺区上汐五丁目三一―八

Tel 〇六一六七七一―一四六七